学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１２年９月１日
文責：ＪＵＮ

セミナー、熱気と感動のもと終了！

７月３０日～３１日、第１４回「授業づくり学校づくりセミナー」を大津市「大津プリンスホテル」で開催、参加者７２０名（過去最多）で終了しました。

稲垣忠彦先生を偲ぶプログラムで開始したセミナーは、２日目の最後、佐藤学先生の講演で終えたわけですが、二日間を通じて、佐藤先生から本当に多くのことを学ぶことができました。佐藤先生は、全体会の報告、分科会Ａの報告に対して、実にていねいなコメントをしてくださったのですが、何よりも１時間４０分に及ぶ講演は、今、「学びの共同体」を目指す学校、「協同的な学び」を志す教師たちにとって、どれだけ確かな指針となったか、どれだけの心強さと意欲を生み出すことができたか、計り知れないものを感じました。参加された皆さんは、佐藤先生のお話に心を満たして帰路につかれたことでしょう。

一日目の二つのプログラムも好評でした。ＮＨＫＥテレで放映された「輝け二十八の瞳、学び合い支え合う教室」の担任教師・古屋和久さんの「『学び合う教室』文化を支えるもの」という報告は、セミナーに参加して本当によかったと思える感動的なものでした。一つの授業の報告ではなく、一つひとつの授業を支える教室の環境であったり、営みであったり、といった古屋さんの諸々の実像が明らかになったからです。それらすべてが古屋さんという人間から発せられていて、まさにそれは古屋学級の文化になっていたのでした。

もう一つは、秋田喜代美先生と濱野高秋さんの「若手教員から学ぶ」という報告でした。それは、初任の教師の授業映像によって、濱野さんがどうその教員を支えてきたか、そして、その初任の教師の変化からすべての教師が学ぶべきものが見えてくる、そういう報告でした。それにしても、こういう取り組みを採り上げ、そこから学んでいきましょうと、こよなく教師のサイドから考えてくださる秋田先生の思いがありがたいと思いました。

２日目の午前は、分科会。今年は小学校を三つの分科会にしたことで、報告者は８人になりました。それぞれの分科会で、よい学びができたこと、ありがたいことでした。今年特に感じたのは、分科会報告者がどれだけ豊かな学びをしているかということです。それは、セミナー当日だけのことではありません。報告書を作成し、報告の手順を考えるとき、どれだけの苦労と、悩みと、発見をしていたか、それがわかったからです。参加者は報告から講師のコメントからたくさんの学びをしたと思いますが、それ以上のことを報告者は学んでいるのですね。報告する人も報告を聴く人も学べるセミナーでした。

熱い二日間でした。充実感を胸に、また一年先を目指します。ありがとうございました。

子どもが「みえる」ということ

１　事例研究に参加して

夏季休業日のある日、わたしは、Ａ小学校の夏季研修会に招かれました。初めて訪れた学校でした。その日の研修内容は二つ。一つは、一年生の国語の授業の事例研究、もう一つは、六年生の人権学習の事例研究、どちらもＤＶＤ映像を視聴して考えるというものでした。

人権学習で、テキストとして取り上げられていたのは、灰谷健次郎の『だれもしらない』（あかね書房）という児童文学でした。主人公は、養護学校に通うまりこという女の子。小さい時の病気がもとで、筋肉の力がふつうの人の十分の一しかなく、話すことばも正確に発音できない子どもです。そのまりこが、養護学校に行く通学バスに乗るために、家からバスストップまで毎日四百メートル歩くのですが、そこでまりこがどんなことを経験し、何を見て、どう感じているのかが描かれた物語なのです。

ＤＶＤに撮影された授業で子どもたちが話題にしていたのは、ハチにまつわる出来事の場面です。まりこは、ハチの〝しゃぼん玉ふき〟を見ます。そして、去年の夏、目の前で四、五人の少年がハチに襲われたときのことを思い出します。まりこは、ハチは話しかけてくる人間を絶対に刺さないということを知っていて、「しれば友だちになれるのに」とつぶやく、そんな一年前のことを思い出した、という場面です。

わたしは、学校に着いてから授業の映像を見ました。そこに映し出された子どもたちは、実に素直でした。自然体で語り、それを聴き合うすがたは、六年生とは思えないほどのやわらかさを感じさせてくれました。

授業は、作中のまりこについて感じたことを語ることから始まりました。そのほとんどは、まりこがハチのことをよく知っていて、「しれば友だちになれるのに」と言っていることにかかわることでした。そのうち、一人の子どもが「『しれば友だちになれる』というのはハチとのことだけではない」と言いだします。すると、それを受けて別の子どもが、この物語のことではなく、自分たちの学校にある特別支援学級にいるやすおくん（仮名）のことを語り始めたのです、次のように。

「あの〜、実際にぼくにあったことと照らし合わせて、今年一年生でやすおくん（特別支援学級の子ども）が来て、最初はあまりしゃべらなかったし、知らなかったけど、しゃべっているうちにやすおくんのことを知っていって、今では友だちみたいになって、まりこが言っているのがわかるかなと思いました」

授業は、この発言を契機に、自分たちと特別支援学級の子とのかかわりに移っていきました。つまり、自分たちが支援学級の子どものことを「知る」ことによって友だちになっていくというように考え始めたのです。この授業は、国語科としてこの物語を読むことを目的として行われていたわけではなく、人権学習として行われていたのですから、物語から離れて自分たちのことを考え始めたことは妥当なことでした。一般には、その切り替えは教師の指示がなければできないことが多く、この授業のように、子どもの気づきから自然に切り替わっていくのは理想的なことでした。

わたしは、その切り替えの発端となった子どもに、その時点でははっきりした理由はなかったのですが、直感的に何か強い思いを抱きました。この子どもに何かがある、それはまさに直感なのですが、その直感の背景に、作中の出来事を自分のことに結び付けて読む子どもにはそう思うだけの何かがあるという考えがあったのだと思います。

この子どもを、りんたろうと呼ぶことにしましょう。わたしは、その後、りんたろうの語ることばに耳を澄まし、りんたろうの表情・仕草を食い入るように見つめました。そして、そこから、この人権学習を深めるうえでとても重要なことを発見することになったのでした。

２　りんたろうが提起したことの重要さ

研修会の翌日、その学校のＦさんからメールが届きました。Ｆさんは、長年、臨床心理学を学んでこられた人ですが、そのＦさんが、りんたろうについて語ったわたしのコメントに対して、次のように書いてくださったのです。

「今回のりんたろうの発言から、りんたろうの〇〇（特別支援学級の名称）の子たちへのかかわりかたが，まるで、先生が見てきたかのように話されたことに，「聴くと言うことは、全人格を受けとめること」という教育相談の基本を思い起こされることになりました。

私は，心理臨床と教育とのつながりを求め続けていますが、今回の先生のお話の中にたくさんそうした内容のものがあり、それもまた嬉しいことでした。」

前述したことですが、Ａ小学校は初めて行った学校であり、この授業も、その研修会で初めて目にしたのです。それなのに、りんたろうの特別支援学級の子どもへのかかわりを語れたということ、それがＦさんには驚きだったのでしょう。

わたしは、このＦさんのメールを読みながら、教師に子どもが「みえる」とはどういうことなのかということについて考えることになりました。わたしが魔法のように子どものことがわかるわけがありません。臨床心理学を深く学んだ経緯もありません。にもかかわらず、わたしは、りんたろうのことをＦ小学校で語ったように思い浮かべることができたのです。それがＦさんを驚かせるだけの見え方だったとしたら、そう「みえる」何かがあったと考えなければなりません。

ふと思いました、このときのわたしの頭のなかでどんなことが巡っていたのか、それをそのまま書いてみようと。わたしには、こうすれば「みえる」ようになりますというようなことを述べるつもりはありません。しかし、やがて古希を迎える年齢になったわたしには、後に続く教師たちに「子どもをみる」という、教師としてとても重要な感覚をつないでいきたいという願いがあります。それには、そのときのことを、そのまま描き出すことだと思ったのです。そこから何かを感じ取ってもらえそうに思ったからです。

わたしがりんたろうに注目した契機は、前述したとおりです。けれども、りんたろうの特別支援学級の子どもへのかかわりが、他の子どもと、その質と深さにおいて異なっていると確信したのは、次の二つの彼の発言からでした。

「みんな、けんだまとかこまとか動くものが好きだったけど、ちからくん（やすおくんと同じ特別支援学級の子ども）だけ紙芝居のところでずっと座って、三分の一くらい一人でおった。で、ちからくん、紙芝居好きなんやなって・・・」
「遊びに行ったときさあ、〇〇のねぎばっかり載っとる本、あれを２０分間ずっと読んどった。読み終わったんやったら、『遊ぼか』って言っても読んどった」

他の子どもたちが語ったこと、それは、
「話したら手をつないでくれてうれしかった」
「ドッチボールでボールの投げ方を教えたら飲み込みが早かった」
「好きな食べ物をちからくんのお母さんから聞いた」
などというものでした。それは、すべて、自分がこのようにして、特別支援学級の子と仲良くなったり、知ることができたりしたというものでした。つまり、子どもたちは、「知れば友だちになれる」ということを、自分が働きかけてこのように知って、友だちになろうとしたということを話したのです。素直な子どもたちです。その考え方と行為を否定するものではありません。

けれども、りんたろうの言っていることは別次元のことでした。彼は、特別支援学級のちからくんが紙芝居や本に夢中になっている様子を語ったのです。りんたろうが働きかけたのではないのです。彼は、じっとちからくんを見つめたのです。わたしは、そのことに感動しました。相手のことを「知る」ということは、相手のために何かをしたり、働きかけたりすることによってもある程度可能ですが、それよりも、その相手を「みつめる」という行為によって大切なものを感じ取ることができると思うからです。

そう思って、りんたろうの言葉を噛みしめたとき、それは、『だれもしらない』という作品に書かれていることそのものだということに気がついたのです。

まりこが、たった四百メートルを歩くうちに、出合い、感じ、心をゆらせていることは、だれにもわからないことだと、この物語には書かれているのです。『だれもしらない』という書名はそういう意味なのです。ということは、作者の灰谷さんは、この本を読む読者

に、あなたは、まりこがこんなことに出合い、こんなことを気づいているという事実を知っていましたか、と語りかけているのだと思うのです。灰谷さんは、それに気づいていない読者を非難しているのではありません。そうではなく、だれも知らない、まりこのような子どもの生きる姿を、本当はこんなに豊かな出合いをして、こんなに心を働かせて毎日を送っているのですよと伝えようとしているのです。

そうだとすると、わたしたちは、まりこのような子どもに何かをしてあげるということよりも、しっかり見つめ、寄り添い、その子どもが有している世界を感じ取ることにもっと心を傾けるべきだと思うのです。大切なのは、「見つめる」眼差しなのです。

りんたろうが、ちからくんに働きかけたことではなく、自分はちからくんのこんな様子を見たよと語ったことは、まさにその「見つめる」ということだと、ＤＶＤ映像を見ながらわたしは気づきました。そのとき、わたしの中に、りんたろうが、特別支援学級に行ったときの、ちからくんややすおくんへのかかわり方が見えてきたのです。もちろん、具体的に何をどうして、どのようにしているかというすがたが見えるはずはありません。ただ、わたしが感じたのは、彼は、何かをしてあげるとか、やさしくしなければといったことではなく、ちからくんややすおくんを丸ごと受け止めようとして、寄り添うような接し方をしていたのではないかと感じたのです。

わたしは尋ねました。「りんたろうという子どもは、特別支援学級の子どもたちとどのように接していますか？」と。すると、それに応えて、Ｆさんが「そう言えば」と、何かに気づいたかのように次のように話してくださったのです。

「りんちゃんは、ちからくんややすおくんを、両足の膝で挟むようにして接していました」

Ｆさんは、このりんたろうのポーズに、心理学的に大切な何かを感じられたのだろうと思います。わたしは、何かをしてあげるという働きかけよりも、見つめ、寄り添うというかかわりの大切さを言いましたが、自分の両足の間に包み込むようにしているりんたろうのすがたに、わたし流に言えば「寄り添い」を感じられたのかもしれません。

りんたろうは、ちからくんややすおくんを自分のからだに包み込むようにしてかかわっています。そして、ちからくんが、自分の想像を超えるほどの熱心さで紙芝居や絵本を読むすがたを見つめています。わたしは、りんたろうのその目線に、ちからくんの世界を感じ取ろうとする意思を感じます。りんたろうはそこまで意識はしていないでしょう。けれども、２０分もの間本を読むちからくんを待っていたということに、ちからくんの世界への寄り添いを感じるのです。それこそ、「だれもしらない」まりこの世界への寄り添いと共通する行為なのではないでしょうか。そう思ったとき、りんたろうの何かがわたしには「みえた」のです。

これが、ＤＶＤ映像による事例研究の際のことの顛末です。

３　子どもを見つめる教師の眼差しこそ

授業は、テクニックだけ追求しても豊かにはなりません。人を対象として、人にかかわり、人の成長に責任を負うわたしたちの仕事は、人間的な要素で包みこまれています。形式的、技能的なやり方だけ身につけてできる仕事ではありません。そこには、人間性と感覚がなくてはならないのです。

わたしは、「学び合う学び」は、すべての子どもの学びを保証すると述べています。学校教育がすべての子どもの学びを保証するのは当然のことですが、大勢の子どもを対象とする教室においては、その具現化にはさまざまな難しさがあります。

「学び合う学び」がグループ学習を重視するのは、まさに、すべての子どもの学びを保証するためです。どんなにわからないことがあっても、間違いや混乱の森に迷い込んでいたとしても、そのことを受け止め合う仲間との学び合いがあれば、すべての子どもがそれぞれの学びに向かうことができるのです。

けれども、グループ学習さえすれば、すべての子どもの学びを保証できるかというと、そうだとは言えません。そこになくてはならないものがあるのです。それが、一人ひとりの子どもを見つめる「教師の眼差し」なのです。

まりこは「しれば友だちになれる」と言っています。それと同じように、教師は、子どもに働きかけ、指導するばかりでなく、子どものことを知らなければなりません。そのためには、子どもに「寄り添い」、子どもを「みつめ」なければなりません。しかも、一人ひとりに対してです。それができないでいて、いくらグループ学習を取り入れても、それは単なる形だけのものとなるでしょう。

わたしがりんたろうという子どもについて見えたもの、それは、ごくごく一部分のことです。また、どんなＤＶＤを見ても、子どものことがみえるわけではありません。わたしがみえるには、何かに気づくことのできる状況が授業に生まれていることが条件になります。そういう意味で、『だれもしらない』の授業をされた授業者がいちばん素晴らしいのです。そして、その授業者を取り囲むＡ小学校の教師たちが素晴らしいのです。

Ａ小学校では、これからも「子どもを見つめる」教師の眼差しが大切にされていくことでしょう。それはわたしにとってなんともうれしいことです。Ａ小を訪問させていただいてよかった、わたしは、しみじみそう思いました。